

(丹波竹田)

今回報告する木簡は、確認調査の際に出土しているが、一九九七年度に同地点の全面調査が実施され、但馬道とでも呼ぶべき直線の道路状遺構が検出された。道路状遺構が湿地にかかる部分では、法面を礫で保護している。木簡出土地点は

兵庫・加都遺跡

- 1 所在地 兵庫県朝来郡和田山町加都
- 2 調査期間 一九九六年(平8)十一月～一九九七年一月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 4 調査担当者 別府洋二・仁尾一人
- 5 遺跡の種類 集落跡・道路状遺構・水田跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～鎌倉時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

加都遺跡は、周辺では最も広い盆地の中央部にあり、日本海に注ぐ円山川とその支流である黒川に挟まれた平野部に立地する。

その法面の下方にあたる。この道路状遺構は近辺に残された条里地割とは方向が異なり、平安時代後半には廃絶して条里地割方向の掘立柱建物が建てられるようになる。

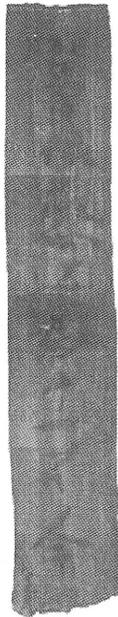
8 木簡の釈文・内容

- (1) 「山口里俵参上数十一石今

(205)×35×5 019

木簡は下端が折損している以外は、原形を保つ。裏面は調整が荒い。「山口里」は、『和名類聚抄』にみえる但馬国朝来郡九郷の一つである山口郷と考えられ、ここは当時の但馬国の最南端であった。調査地点からは南に約一kmの地点にあたる。

なお、木簡の釈読にあたっては、奈良国立文化財研究所の古尾谷知浩氏、山下信一郎氏、渡辺晃宏氏のご教示を得た。



(赤外線テレビカメラ画像による)

(別府洋二)